

産業振興センター空間デザインの策定について

中野区産業振興センターを中小企業支援の拠点とし、経営者や区民が集い新たな価値が生まれる場所とするため、既存施設の改修に向けた空間デザインを策定したので、以下のとおり報告する。

1 空間デザイン（案）からの主な変更点

- ・ 1階（外構）にある「自転車スペース」の位置を西側通路へ移動（p 6～8）
- ・ 2階のオフィス空間のレイアウトを変更（p 14～15）
- ・ 3階にある「会議スペース-01」のレイアウトを変更（p 16～17）
- ・ 南側広場のデザインを追加（p 21）

2 空間デザイン 別紙のとおり

3 今後の予定

令和8年度 産業振興センター改修設計及び1階の一部工事
令和9年度以降 産業振興センター全体改修工事

2026-03

空間デザイン

基本コンセプト

BASIC CONCEPT

「経営者が集いやすい場」

本事業において「経営者」とは、法人の代表者に限らず、個人事業主、スタートアップの代表者等を含む広義の概念として定義する。あわせて、事業者本人のみならず、その家族にとっても来訪しやすい環境の整備を推進する。

こうした環境のもと、新たなつながりや交流、取組、ビジネスの創出を促進する。

空間コンセプト

SPATIAL CONCEPT

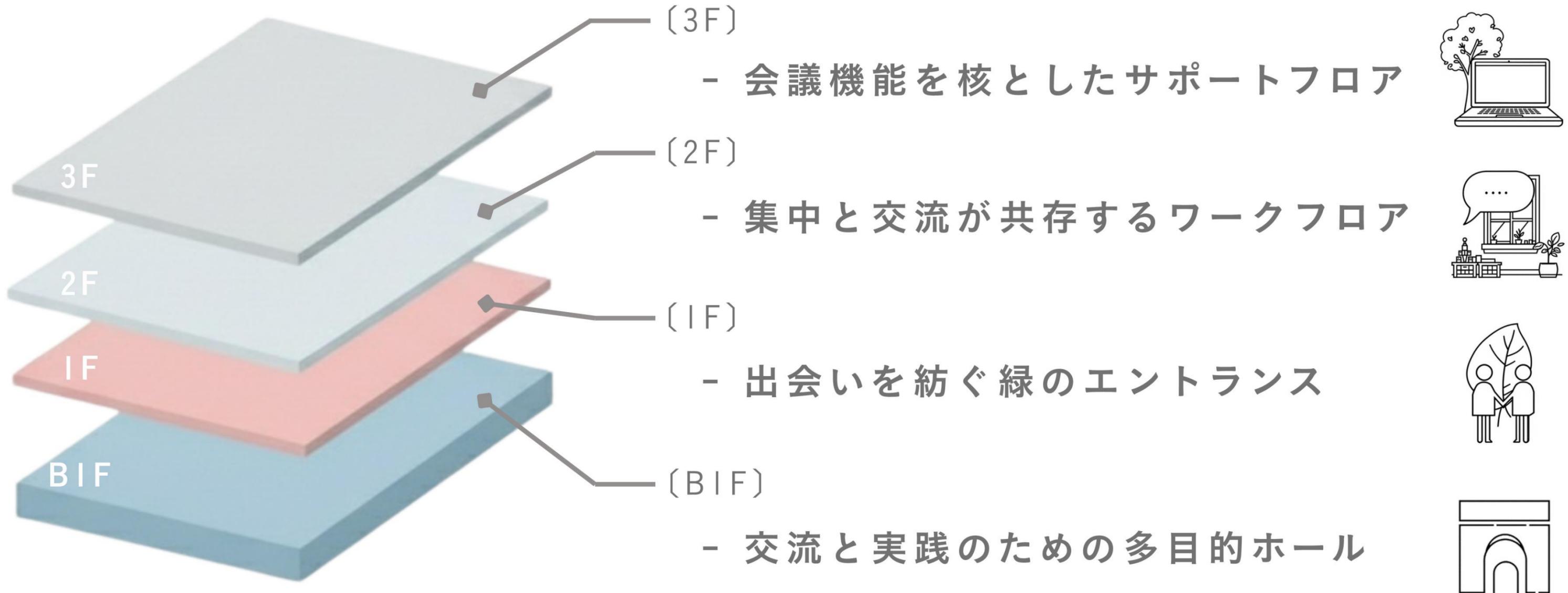
「ここから始まる、次の物語」

経営者が安心して集い、語り合い、偶然の出会いや会話から新しい挑戦の芽が育つ。

国産木材をはじめとした自然素材を取り入れ、庭や緑と調和した空間とすることで、利用者には開放感と安心感を提供します。落ち着いた環境と温かな雰囲気の中で、未来の可能性を共に描き、それぞれの活動や物語を育む拠点として機能していきます。

「ここから始まる、次の物語」

FLOORS CONCEPT



重点的な取り組み

公共性の
担保

「誰もが集いやすい場」にもつながり、
ユニバーサルデザインの理念にも合致するもの。

交流の場

新たなつながりや交流、ビジネスの創出を促進し、
地域経済の活性化に貢献してまいります。

生活に
寄り添う

「経営者」を広く捉え、
経営者の家族にとっても来やすい場とします。

女性にも
優しい

若年層や女性経営者の視点を踏まえた
施設整備を推進します。

現状の課題を踏まえた空間イメージ提案

[課題の一例]

外から中が見えづらく、外壁の重厚感から中に入りにくい雰囲気がある。

庭の緑が鬱蒼としており、夏場は蚊などの羽虫が多くいる。

施設内が全体的に暗く、どんよりとしている。

閉鎖感があり、施設全体の風通しが良くない。

などなど



“ 開放感・自然との調和・明るさ ” を重視した空間設計が重要

庭の緑を整えた快適な環境づくりに加え、施設内部にも無垢木材などの自然素材を積極的に取り入れます。

これにより、外と内の自然がつながり、光や風を取り込みやすい快適な空間が生まれ、

誰もが気軽に立ち寄りやすく安心して過ごせる場を目指します。

駐車場 ~ メインエントランス

OTHERS

駐輪場の整備

体育館エントランスの動線上にあった駐輪場を再区画

体育館エントランス

体育館へは内部通用口ではなく基本的にはこちらのエントランスを使用することを想定しています。



エントランス ～ メインロビー

MAJOR PARTS

04 温もりで迎える、新しい顔

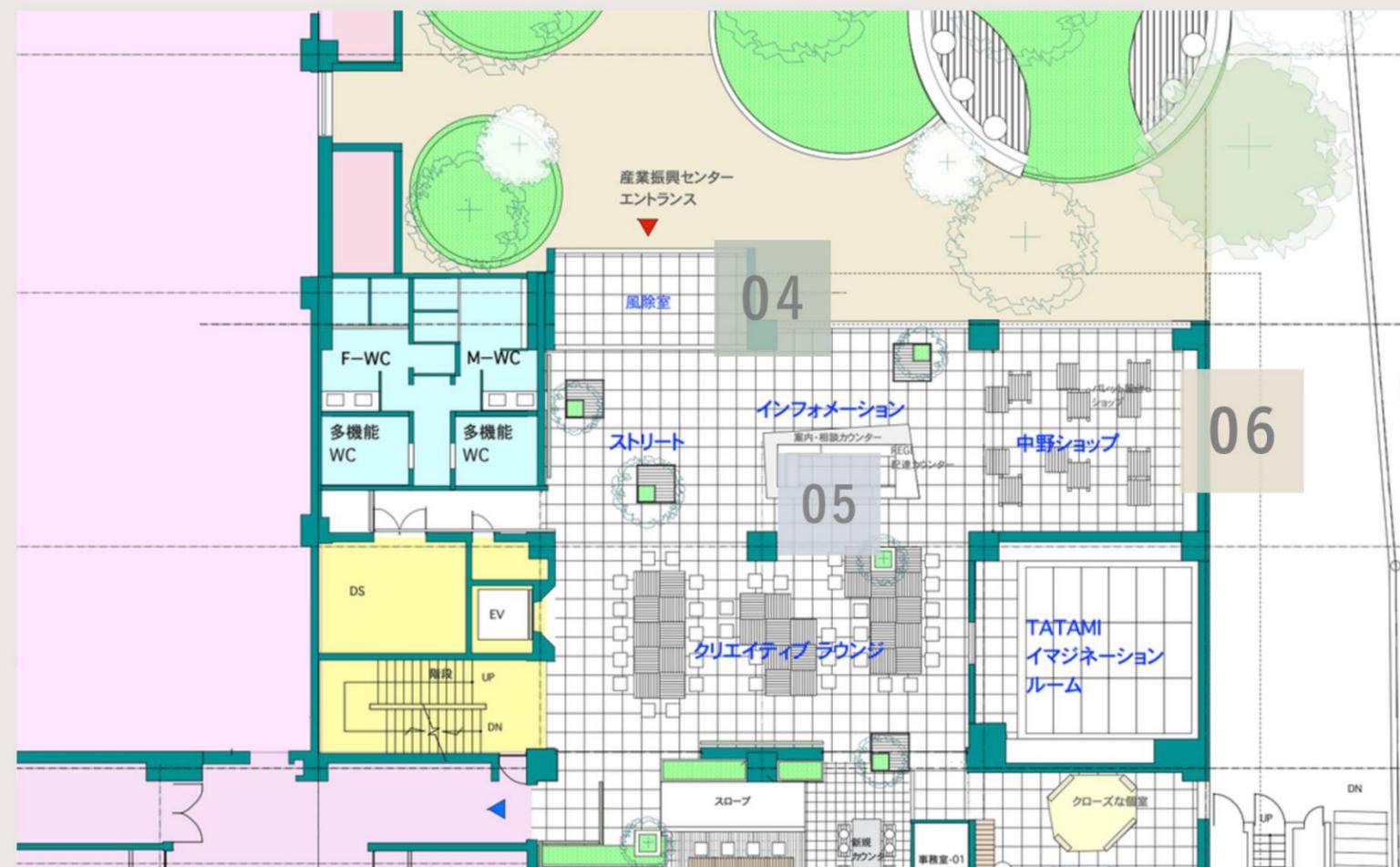
やや重厚な印象となっているエントランス外壁を、温かみと親しみを感じられる外観へと改修します。

05 総合カウンター設置

総合インフォメーションカウンターを設置し、受付・ショップレジ機能を搭載。室内植栽や天井飾り材などの自然素材を用いた空間に。

06 中野区の産業発信ブース

中野区の産業の歩み展示にとどまらず、現在活躍している事業者のPRスペースや団体の応援ブースなど中野区内の“取り組み”を応援するエリアに。中野区のグッズ販売なども想定しています。



エントランス ～ メインロビー

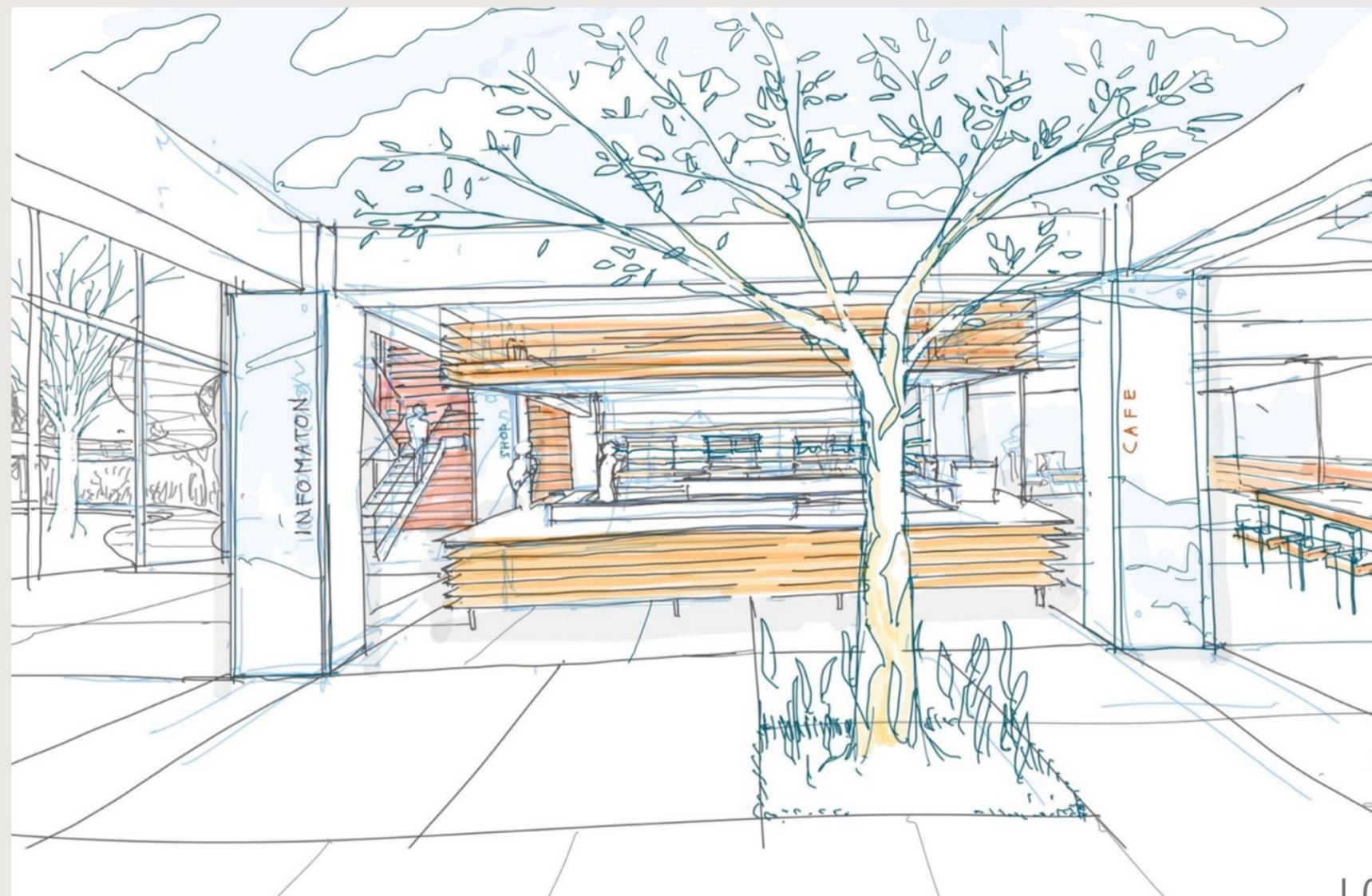
IMAGE - 05

05 総合カウンター設置

ここから広がる、つながりの森

エントランスを抜けると、ワイドなインフォメーションカウンターが来訪者を迎えます。単なる窓口ではなく、カフェスタンドや大型サイネージを備え、情報や体験が自然に行き交う場所に。室内植栽や天井飾り材などの自然素材をふんだんに用いることで、森を歩くような感覚で、新たな出会いやアイデアが芽吹く入口空間にすることを目指します。

また本エントランスは、外の自然と中をつなぐためのシンボリックな存在として演出することも意味しています。



エントランス ～ メインロビー

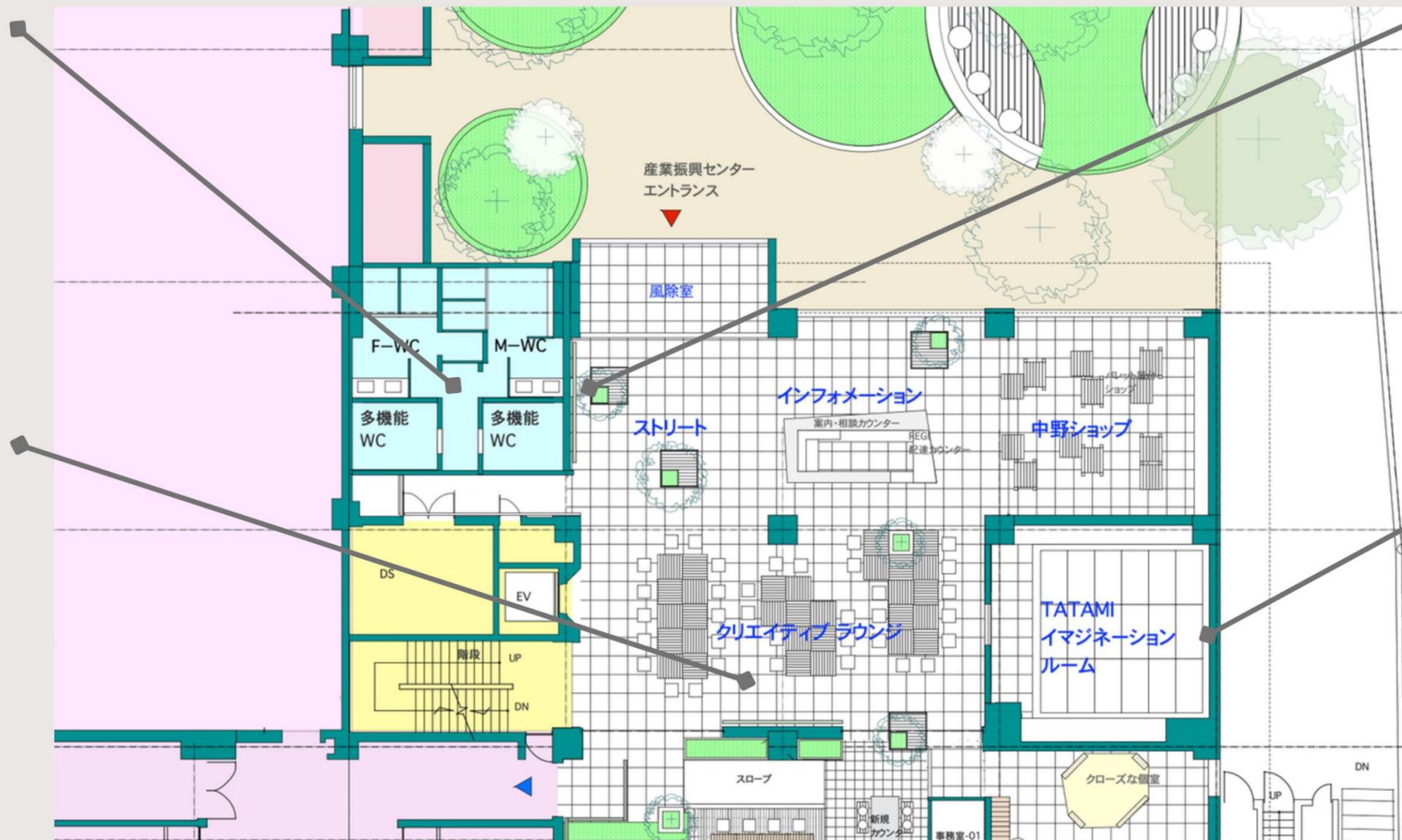
OTHERS

ベビーケアルーム

トイレ（水回り）の改修に伴い、授乳室やおむつ替えスペースを用意。既存面積を有効活用し、設置を検討します。

ラウンジエリア

フレキシブルデスクをメインとした中規模の公開イベントや交流会に適したエリア。エンドには大きなスクリーンがあり、登壇イベントにも活用可能です。



サイネージの活用

施設情報の提供だけでなく、地域のイベントや魅力、クリエイティブなコンテンツを発信するメディアとして活用。デジタルハブの役割を目指します。

畳の創造室

音の出るアクティビティや工作をできる場、イマジネーションワークエリアとして活用。

メインロビー ～ フレキシブルエリア

MAJOR PARTS

07 カフェカウンターの設置

セルフスタイルのカフェカウンターを設置。コーヒーや軽食を手軽に購入でき、経営相談や打ち合わせの合間に利用することで、よりリラックスしながら情報交換や休憩をすることが可能に。

08 相談クリエイトカフェ

天井の高さを活かし、床にはパレットを敷き詰めることで開放感のある木の空間を演出します。外の自然を感じながら、来訪者が肩肘張らずに相談や交流できる場とします。

09 子供連れでも安心

キッズスペースや個室ブースを設けます。子どもの声や動きが周囲に影響しにくく、施設全体との回遊性を保ちながら、親子が快適に過ごせる空間に。



メインロビー ～ フレキシブルエリア

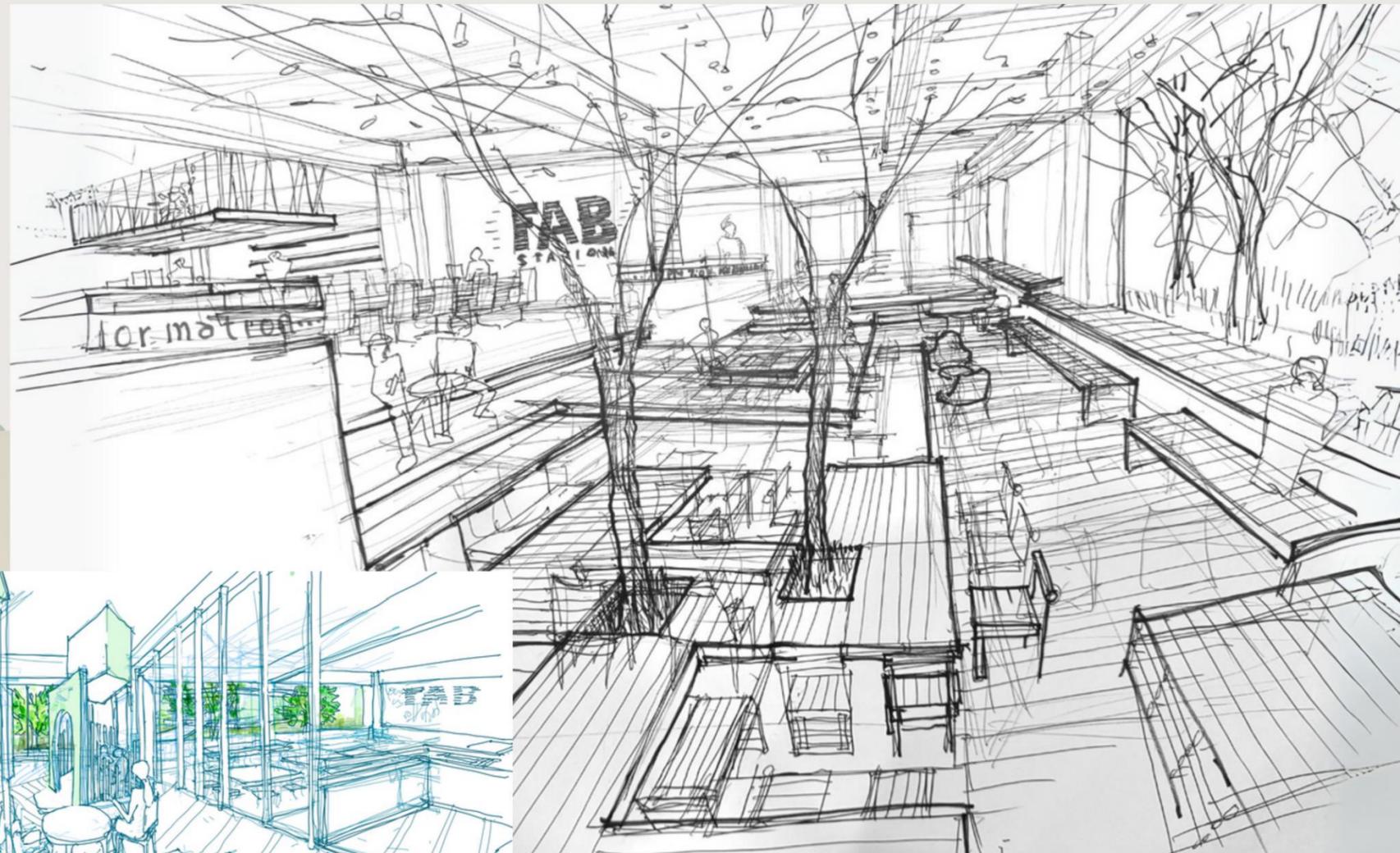
IMAGE - 08

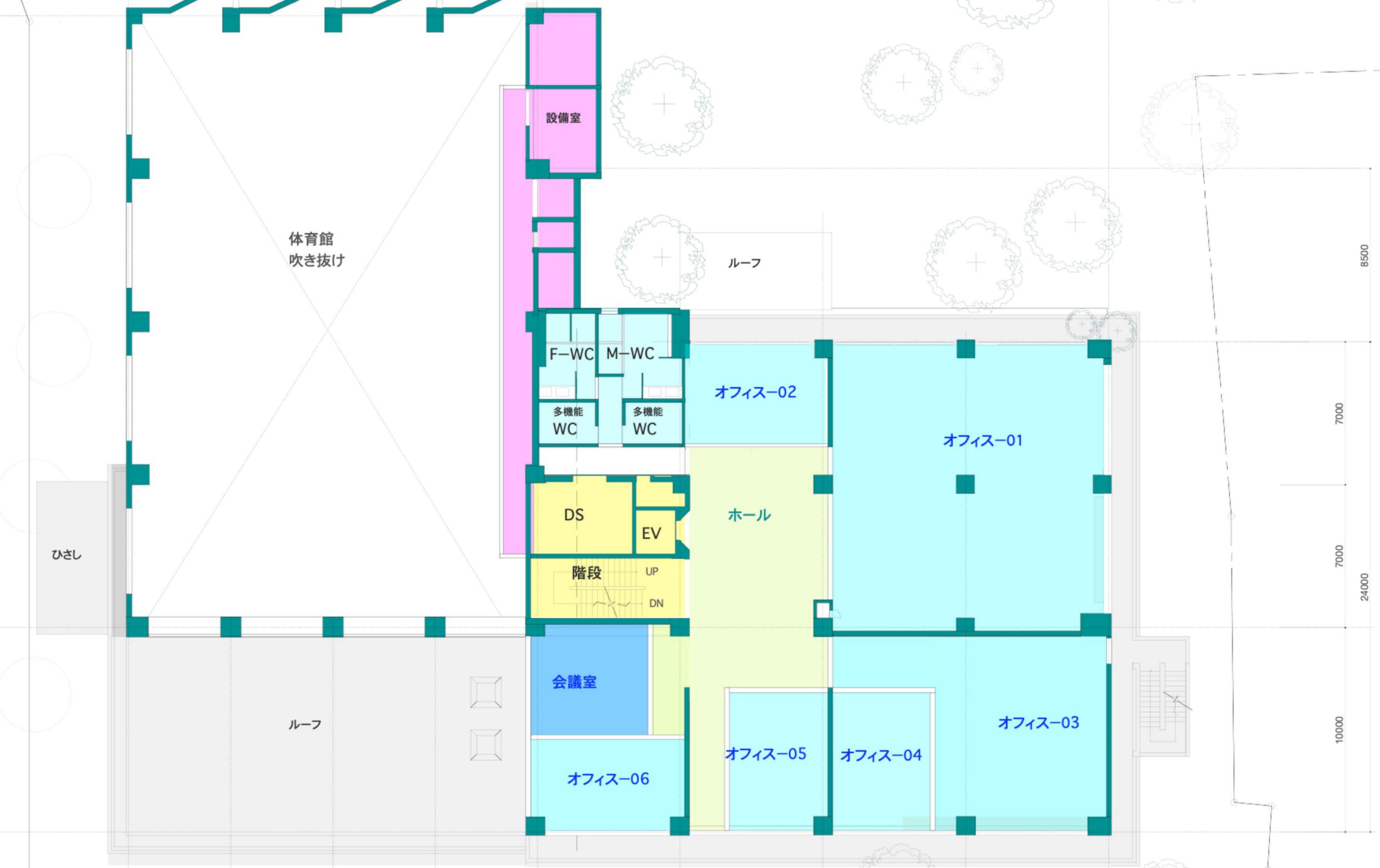
08 相談クリエイトカフェ

- 1段先に、新しい出会いを。

「とりあえず相談してみようかな」と利用者が仕事や将来に関する悩みを気軽に相談できる広場を目指します。

天井の高さや南面の明るさ、庭の景観を活かした快適な環境に加え、程よい距離感を保ちながら安心して過ごせる設計に。個別の相談スペースも備えつつ閉塞感を与えず、誰もがコーヒ一片手に無理なく相談できる仕掛けを取り入れます。区民や経営者が立ち寄りやすい空間づくりを通じ、交流と課題解決を支援する拠点を目指します。



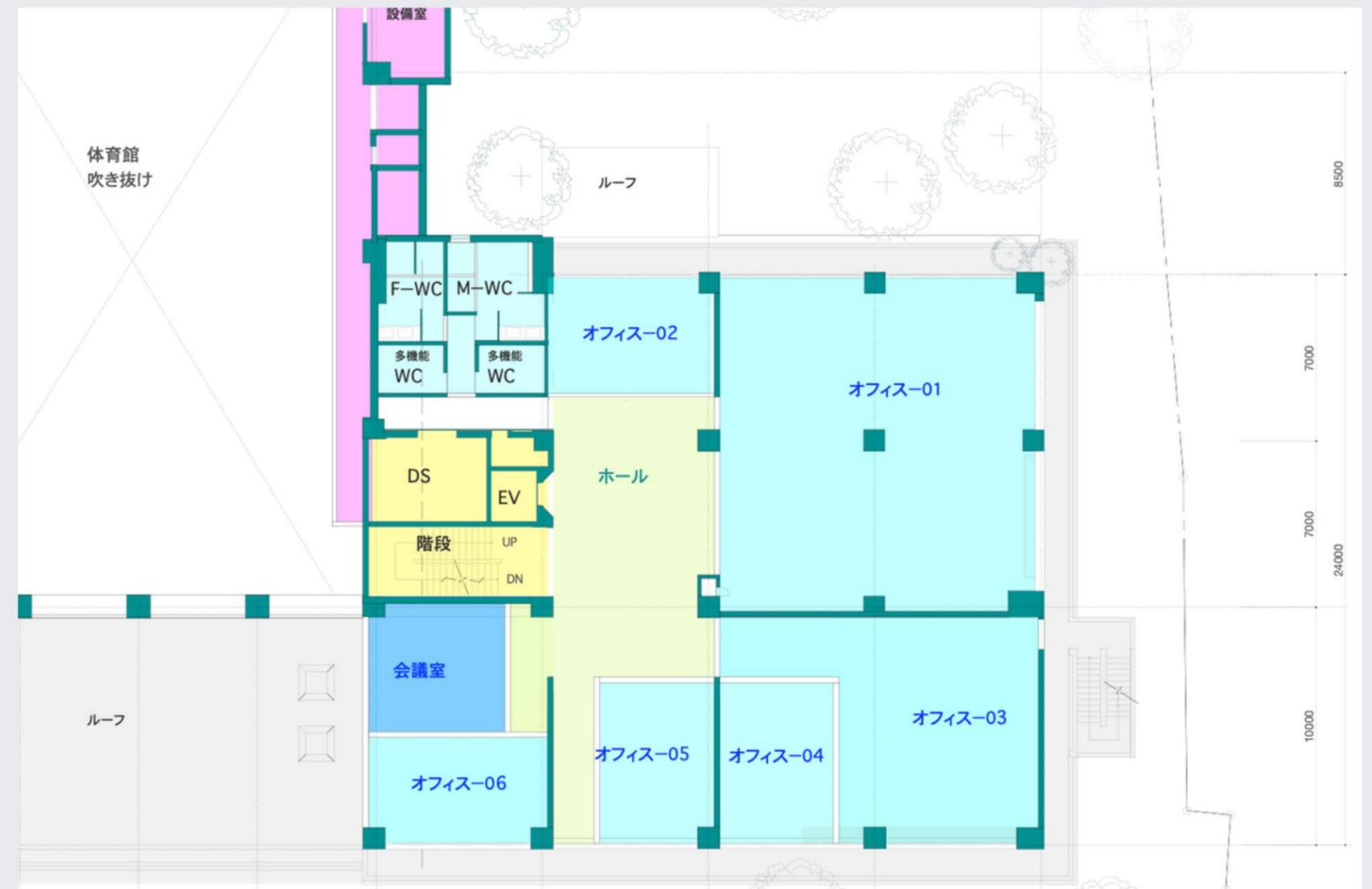


2Fエリア

MAJOR PARTS

10 集中と交流が共存する場

入居する各団体が安心して業務に集中しながら、緩やかな連携や情報共有が生まれるフロアとして位置づけます。過度な交流を前提とするのではなく、視界に自然や緑の要素を取り入れ、今より少し開放的で快適な環境を整備することで、日常業務と雑談・息抜きが無理なく共存できる空間を目指します。クローズドな諸室を除き、団体同士の心理的な隔たりを和らげ、良好な関係性が自然に育まれるフロア構成とします。





3Fエリア

MAJOR PARTS

11 窓際コワーキングスペース

自然光を取り入れたコワーキングスペースを設置します。電源・Wi-Fiを整備し、短時間の事務作業や打合せなど多目的に活用できる環境を提供します。

12 用途に応じて変化する会議空間

セミナーやワークショップなど、用途に応じて無理なく使える空間構成とします。

13 追加設置案 - オフィススペース

2階への入居団体・人数の増加に伴い、3階会議室エリアの一角をオフィスとして整備するパターン。



3Fエリア - 窓際コワーキングエリア

IMAGE - 04

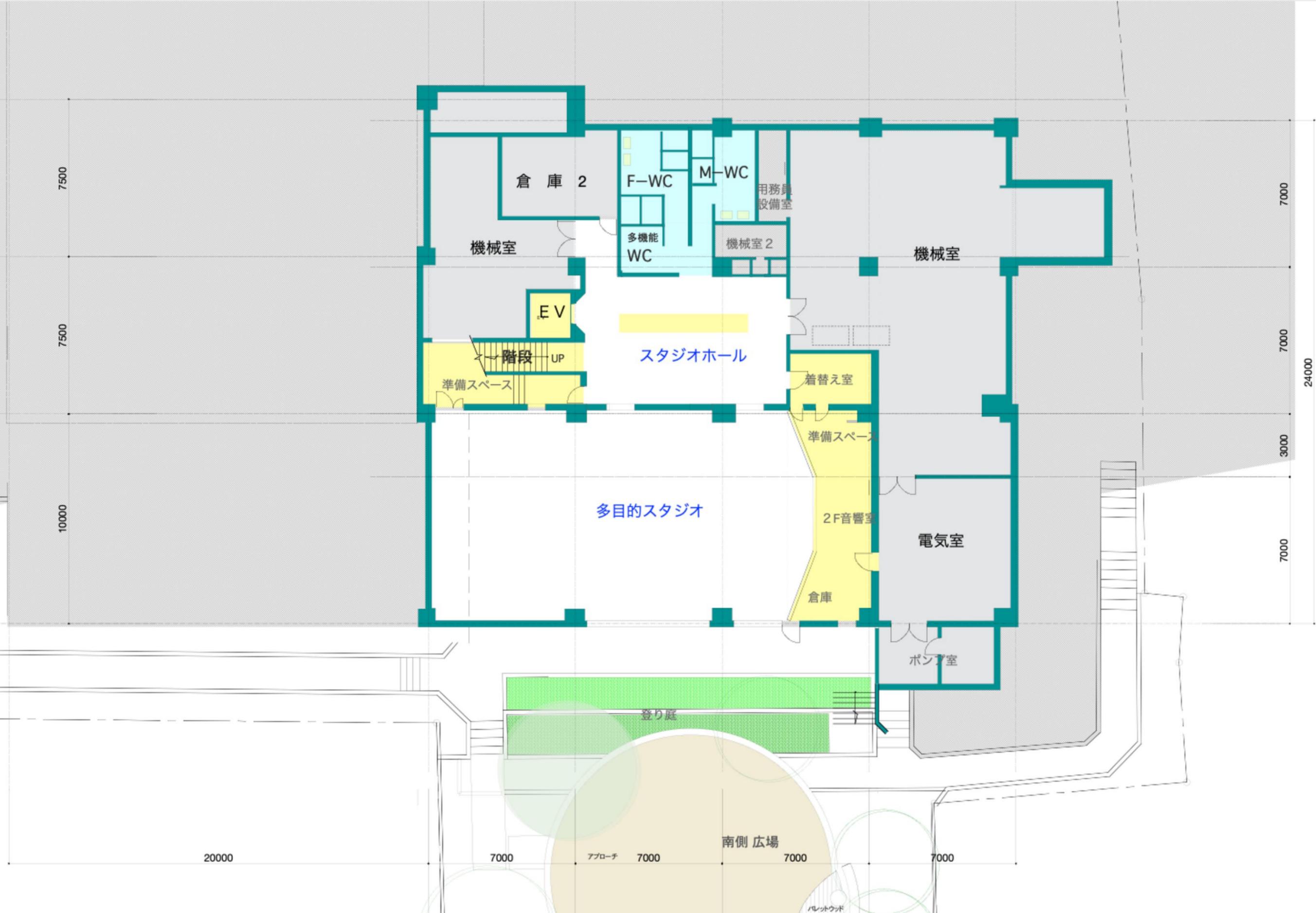
II 窓際コワーキング

- 光さすアイデアラウンジ

自然光が差し込む明るく落ち着いた作業空間です。電源やWi-Fiを完備し、短時間の事務作業や資料整理、打合せなど、多目的に活用できます。カウンター形式により、各自が自分のペースで作業に集中でき、外の景色や光を感じながら快適に過ごせる環境を提供します。集中と快適さを両立した、シンプルで使いやすい窓際の作業スペースです。こちらのスペースは一般の来訪者も使用可能な想定をしています。



reference



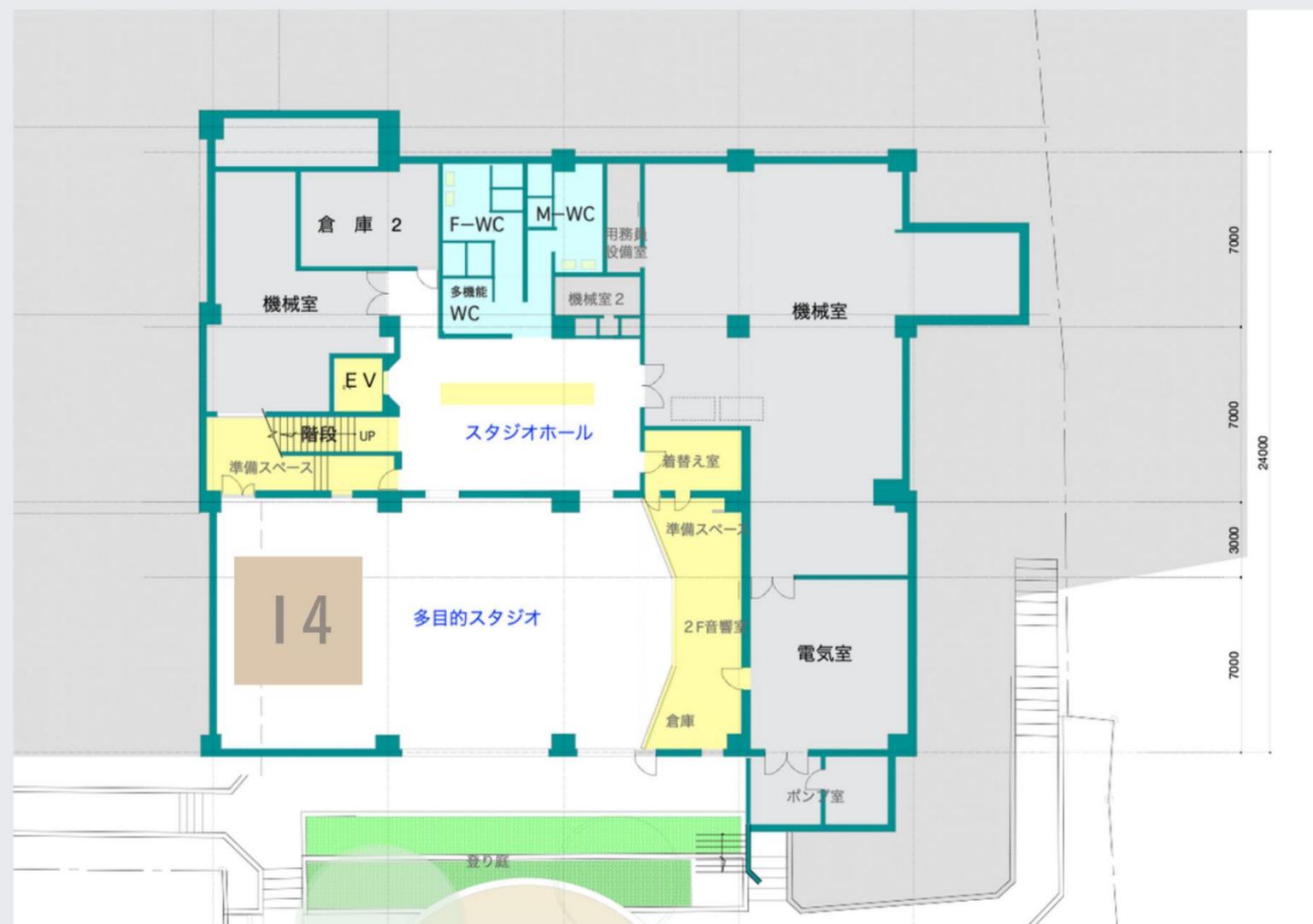
B I F エリア

MAJOR PARTS

14 開放的な多目的スタジオ

天井高を活かした開放感のある空間設計を特徴とします。自然な風通しを意識したレイアウトにより、地下でありながらも明るく心地よい空間となるよう配慮。床や壁のカラーチェンジを活用することで、視覚的にも照明的にも明るさと広がりを感じられるホールを実現します。

人々が集い、交流し、自由に使える“ひらけた場所”として、来訪者に快適で創造的な体験を提供します。



その他

南側広場

□ 南側の庭園の整備

変化を受け止める南側スペース

メインエントランスと南側庭園を東西の通路でゆるやかにつなぎ、施設全体の回遊性を高めます。南側庭園を建物に奥行きと広がりを与える外部空間として位置づけ、訪れる人が自然へと意識を向けられる構成とします。

また、将来的な利用ニーズの変化に対応できるように、用途を過度に固定せず、今後の運用や状況に応じた多様な活用の可能性を見据えた整備方針とします。

